
RPG × 学園(仮)

滝川朱也

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

RPG×学園（仮）

【Nコード】

N6865Y

【作者名】

滝川朱也

【あらすじ】

近年、少子高齢化が進む日本。だが次世代を担う子供達はどんな時でも手にはゲームに携帯電話。このままでは日本の未来がダメになる。そう考えた政府の代表は緊急国会を開き、ついに一つの解決策が生まれた。「RPGのような学校をつくっちゃまえ!!!」日本の未来は果たしてどうなるのか!?

プロローグ

近年、少子高齢化が進む日本。

ただでさえ若者の数が激減している中、今時の子供達は、家にいる時も、校内にいる時も、食事中の時すらも、手にはいつもゲームに携帯電話。

家にいても勉強はおろか、外に出かけることも少なくなった。このままでは日本の未来が危ない。

そう考えた政府の代表達はついに緊急国会を開いた。

だがそれから一ヶ月。

今だに解決策は出てこない。

「……………」

万策尽きたのか、沈黙に包まれる国会。

そんな中。

バンッ。

突如として入口の扉が開く。

扉の前にはゲームを片手に一人の女性が立っていた。

彼女は国会議員のすべての視線をジャックした。

少しの沈黙の後。

彼女は言った。

「だつたら作つちまえよ… RPGのような学校を……！」

発案者、滝川茜たきかわあかねのその発言から数年後。

他国の協力もあり、ついに東京都内に夢有学園ゆめあり高等部が開校。

国内に新旋風を巻き起こした。

夢有学園は今までに存在した教育方針を一新。

学問は午前の部のみ。

午後からは各ギルドと呼ばれる少数グループに分かれ活動する。主な活動内容は、日本各地から依頼されるクエストや、バーチャルの世界の探検だ。

しかし、どうやらただのクエストやダンジョン攻略ではないらしい。

他にも運動会や学園祭などの年間行事数も豊富。
なかでも夏と冬に各ギルドで競い合う二大イベントは滝川朱音のお墨付き。

もちろんテストも存在する。

開校当時、2・5chが炎上寸前までいくほどの話題に。

だが教育方針の一新などから、当初は保護者の反対の声もあった。

しかし、あれから三年が経過した今。

保護者の見方が大きく変化した。

さまざまな掲示板に連なる喜びの文章の数々。

「以前は暗かった子が、笑って話すようになった」

「娘が三年ぶりに会話をしてくれて涙が止まらなかった」

保護者をも味方につけた夢有学園は年々入学希望者の数を増やし……。

今年ついに倍率200倍を突破。

有名な大学や企業にも卒業生を大勢送り、今や日本トップの有名校へと成長を遂げた。

これはそんな夢有学園へ、半ば強制的に入学させられた不良少年の日常を描いた物語。

出会いは突然に

季節はもうすぐ卒業シーズン。

肌寒い風にも春を感じながら、少年は一人街中を歩いていた。顔と手には、できたばかりの真新しい痣や傷。

先ほどケンカした時にできたものだ。

（もうすぐ卒業：か）

彼は、通っていた中学にほとんど行っていない。

中学に入っつてすぐ、不良と呼ばれるようになった者に、居場所などあるわけがない。

少なくとも彼自身はそう思っていた。

毎日、朝から晩までケンカしてはまたケンカ。

その繰り返し。

つまらない日々の連続。

少年は歩きながら時計に視線を落とす。

時刻は17時を少し回っていた。

「いつもより早いけど…いいか」

少年の呟く声。

彼はそのままスーパーへと向かう。

（今日は豚肉と卵だったな）

今日は近くのスーパーの特売日らしい。

（暗くなったらますます冷えてきたな）

歩きながら空を見上げる少年。

スーパーに着く頃にはすっかり日も沈み、辺りは暗くなっていた。
少年は再び時計を確認する。

（やっぱりまだ早いな）

彼はスーパーへは入らず、近くのコンビニへと向かった。
だがその途中。

「やつ…やめてください!」

隣の公園から女の声が聞こえてきた。

「そうゆうの困ります!」

どうやら揉め事らしい。

しかも……。

よく見ると複数の男に対し、女の方は一人だった。

しばらく様子を見ていると。

彼女の嫌がる声が大きくなった。

それなのに、周りの人間は見て見ぬ振りをする。

そんな周りの連中を少年は一度睨みつける。

(……勝てねえかもな)

相手は体格から見て高校生。

いくらケンカ慣れしていても、正義のヒーローなんかじゃない。

ただの不良である。

それは少年自身一番よく理解していた。

だが……。

「おい…やめろ」

少年にとってそれは、助けない理由にはならなかった。

彼は、少女の方へ背を向ける。

目の前には3人の相手。

だが一歩も怯んではいなかった。

「……………」

少しの間、沈黙が流れる。

それから数秒後。

真ん中の男が口を開いた。

「なんだデメエ……」

そのまま少年の胸倉を掴む。

「理由はわかんねえけど…三人がかりじゃなきゃ女に話しかけらんねえのか?」

公園に響き渡る少年の声。

それが開始の合図となった。

……あれから数分後。

少年はふらふらになりながらも歩き出す。

なんとか奴らとのケンカに勝つことができた。

だが……。

彼には勝利の余韻に浸っている余裕はない。

なぜなら……。

「しまったー！」

スーパーの特売は18時から。

（特売の品が……！）

慌てて時計を確認する少年。

時刻は18時を少し回っていた。

「ヤバイ……！」

彼はすぐに公園を出ようとする。

しかし……。

「まっ……待ってください」

背中から聞こえる声。

振り返ると、そこには先ほどの少女が立っていた。

（なんだ、まだいたのか）

今の少年には、少女に構っている余裕はない。

「わっ……私の方ですか？」

おまけに少女は意味不明な言葉を口にする。

（変なのに首を突っ込んでしまったよ……）

落胆する少年。

その間も彼女の言葉は続く。

（はあ……しょうがねえ）

らちがあかないと思った少年は彼女に、自分の名前だけを書いた紙を渡す。

「俺……急いでるから」

「えっ……？……ちょ、ちょっと！」

そのまま少年は全力疾走。

もう彼女の声など聞こえてはいなかった。

「……………」

公園に一人残された少女。

ふいに彼女は携帯電話を取り出す

そのまま登録してある番号へ。

プルルルル…ガチャ。

「あつ…パパ？探して欲しい人がいるんだ……………」

「うん…そう、名前は…たきかわしゅや滝川朱也…うん、よろしくね」

ピツ。

「私をシカトするなんていい度胸じゃない…………覚えてなさいよ、

滝川朱也……！」

少女、柊エリスは一人笑う…………。

気味の悪い夜風に吹かれながら。

それからしばらくして。

少年改め、滝川朱也は一人帰り道を歩いていた。

案の定…………。

朱也は特売の品を手に入れることはできなかった。

「はあ…あんまりだ……」

思わず漏れるため息。

自宅に着く頃には20時を回っていた。

靴を脱いでリビングへ。

そのまま椅子に腰を下ろす。

数分後…………。

「いててっ……」

ケガの治療も無事終了。

テキトーに晩飯も済ませる。

食器を片付け、自分の部屋へ。

朱也は現在一人暮らし。

幼い頃に両親が海外へと出張。

歳の離れた姉もRPGがどうとかで三年前に失踪。
もともとは四人で暮らしていた家もずいぶんと広くなった。
ガチャ。

朱也がドアを開けるとそこは暗闇の空間。
部屋の中は殺風景だった。

寝るためだけの部屋。

ベッド以外の家具などほとんどない。

「今日はもう寝よう」

自然とあくびがでる。

目を擦りながらベッドへ。

「あれっ？」

おかしい……。

ここで朱也はおかしなことに気付く。

不自然に膨れ上がった毛布……。

もう一度言おう。

この家には”朱也しかない”。

すぐさま近くの金属バットを掴む朱也。

（ヤバイヤバイヤバイ）

彼が驚愕の表情を浮かべたのはいつ以来か……。

朱也は忘れたことはない。

幼い頃に姉に無理矢理見せられた映画……『リグ』。

それは当時6歳だった朱也にトラウマを植え付けるには十分すぎるものだった。

（逃げちゃダメだ…逃げちゃダメだ）

しかし、朱也も男である。

逃げたい気持ちを押し殺す。

そして一歩、また一歩と朱也は”それ”へと歩み寄る。

バクンッバクンッ。

どんとと跳ね上がる心拍数。

ついにバットの射程圏内へと入った。

「スー…ハ…スー…ハ…」

心を落ち着かせる朱也。

そこはもう…。

一切の音もない無音地帯。

額から流れる汗。

それが頬をつたい…。

ぴちゃっ。

床へと落ちた。

「うおー!!!」

朱也は思い切りバットを振り下ろす。

……その直後。

ガバツ。毛布が弾け跳んだ。

「うああー!!!」

毛布と一緒に朱也の体も後ろへ吹き飛ぶ。

ドンツ。

そのまま壁に激突。

（死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ）

もはやパニックに陥っていた。

ベッドの上には人型のシルエット。

その中央部分是不気味に光っていた。

ヒタツヒタツ。

光は徐々に朱也の方へ。

「……………」

もはや朱也には立ち上がる力も残っていなかった。

ヒタツヒタツ。

そしてついに光が目の前に。

（ごめんなさいごめんなさいごめんなさい）

下から上へと上がっていく光。

あまりの恐怖に朱也は目を

閉じた。

「……………」

あれからどのくらい経っただろう。

今だ変わらぬ無音地帯。

目を開けるべきか、開けないべきか、それが問題だ。

「スー…ハー…」

朱也は呼吸を整える。

パニックがおさまったのか、冷静な判断ができるようになっていた。

（俺は不良だぞ？怖いものなんてないはずだろ！）

心の中でしばらく葛藤が続く。

（よし…あと10秒経ったら目を開けよう）

ついに朱也は覚悟を決めた。

10…9…

（大丈夫だ）

6…5…

（俺は今、自分のトラウマに勝つ！！！）

3…2…1…

「ゼロ！」

バツ。

力強く両目を開く朱也。

「……………」

目の前の光景を見た瞬間。

朱也の意識は途切れた。

しかし……。

朱也は確かに見た。

『リグ』の子なんかよりも次元が違う恐さをもった。

ゲームの光に照らされた姉の不適な笑みを。

始まりは必然に

朱也は目を覚ますとベッドの上にいた。

ギシッ。

寝返りをうつたび軋むベッド。

（起きるか……）

「んー！ ああゝ……」

朱也は背伸びをしながらベッドから下りる。

そのまま歩いてドアへ。

……だが。

「あれ？」

（なんか忘れてるような……）

朱也は不思議な感覚に包まれる。

疑問を感じた朱也は昨日の出来事を思い返す。

（昨日変な女に会って……ベッドが膨らんで……！！！！）

「思い出した！！！！」

朱也はすぐさま振り返る。

目の前にはベッド。

起きた時には気づかなかった。

だが今……。

朱也の視線の先には姉の姿があった。

朱也の実の姉、滝川茜28歳。

三年前に朱也の前から失踪。

そんな彼女が今、朱也の目の前に。

「……………」

朱也は姉の姿を確認するや、転がるバットを無言で拾い上げる。

（俺は……負けない！）

いろいろな思いがあった。

姉に対する恐怖心や怒りなどだ。

朱也はそんな様々な思いを全部……。
握りしめたバットに込める。

（チャンスは恐らく一度きり）
失敗は許されない。

バットを高々と振りかぶる朱也。

そして……。

渾身の一撃が振り下ろされた。

「死ねえ！！！！！！！！」

バットは物凄いスピードで茜の頭部へ……。
ガッ。

感触は十分。

思いが詰まったバットが茜へと直撃した。

…… かの様に思われた。

「随分なおはよう&お久しぶりだなあ…… 朱也」

感触は確かに感じていた。

しかし……。

振り下ろされたバットの先にあったのは枕。

そして寝ていたはずの茜は真後ろに立っていたのだ。

「はあ…… やっぱダメだったか」

朱也にはもともと殺す気も殺せる気もなかった。

茜のでたらめな強さは朱也が一番よく知っていた。

「お前不良やってんだって？」

気付くと茜は再びベッドの上にいた。

その手には携帯ゲーム機『TST』が握られている。

二人が会話するのは三年ぶりだった。

「アンタには関係ないだろ」

今さらとやかく言われる筋合いはない。

朱也はそう思っていた。

だが……。

「ある」

茜ははつきりと告げた。

「アタシはお前の飼い主だ」

「いや俺犬じゃねえし！」

茜の予期せぬ発言に、朱也は思わずツッコミをいれてしまう。

「いや猫つて可能性も……」

「ねえよ……！」

「じゃあなんなんだよ……！」

「なんでアンタがキレてんだよ！」

「いやキレてないっすよ」

「……だあ……！」

ぽかつ。

「猪木か」

「なんでえ！？」

その後も茜のペースが続いた。

「……………」

朱也の我慢も限界に近づく。

すると突如、茜の顔が真剣な表情に変わった。

「……前フリは終わりだ」

「いやなげえよ！1時間の前フリがどこにあんだっ！」

「お前卒業したら東京に来い」

「つてシカトかよ！」

朱也のツッコミを見事にスルーした茜。

今だ真剣な表情は崩していない。

茜のあまりの真剣さに対応に困る朱也。

とりあえず理由を聞いてみることに。

すると茜は……。

「お前を高校へ通わせる」

まさに即答だった。

「はあっ！？」

それは朱也が想像していた域を遥かに越えていた。

朱也は高校に通う気なんて微塵もなかった。

中学に行っていない者の行く場所じゃない。

それが朱也の考えだ。

「いや無理だって！だって俺、中学すらまともに行ってねえんだぜ？」

「かまわない」

必死に反論する朱也。

だが、茜の言葉の強制力を越えた支配力に、上手く反論できずにいた。

「俺みたいなヤツが高校に入れるわけねえだろ！？」

「入れるから言ってる」

「どこなんだよ？」

「夢有学園だ」

「なっ！？」

夢有学園の名前は、朱也みたいな不良でも一度は聞いたことがある。

「超有名校じゃねえか！」

「いや〜それほどでも」

「なんで照れてんだよ！？」

朱也の心は傾きかけていた。

（なんで俺みたいな不良が夢有に……）

しかしそれでも素直に首を縦に振れない朱也。

朱也は昔から人付き合いが苦手だった。

（学校に俺みたいな人間の居場所なんてねえんだ）

それが首を縦に振れない一番の理由。

「……………」

すると突然茜が黙り込む。

流れる沈黙の中。

（やっとなめたか……）

朱也は立ち上がる。

「もういいだろ？」

そのまま逃げるようにリビングから出ようとした。
そんな朱也の背中を見つめる茜。

そしてただ一言。

「逃げんなよ」

今までとは明らかに違う茜の言葉。

その言葉を聞いた朱也は、まるで金縛りにあったかのように足を止める。

全身に駆け巡る衝撃。

なおも茜の言葉は続く。

「このままずっと……逃げんのか？」

茜の言葉に俯く朱也。

何も言い返すことができなかった。

再び流れる沈黙。

「変わりたくねえか？」

その沈黙を破ったのは、また茜であった。

しかし、その言葉には先ほどと違い、諭すような優しさがあった。

た。

拳を握りしめる朱也。

その手は震えていた。

「俺……だつて……」

消えてしまいそうなほどの小さい声。

次第にその声は大きさを増し……。

「俺だつて変わりたいよ……!!」

朱也ははつきりと口にした。

嘘偽りのない本当の気持ち。

「よく言つた！」

それを聞いた茜の口元は笑っていた。

そこからはもうとんとん拍子で進んでいった。

「あれ？」

（なんか上手く丸め込まれた気が……）

何かもやもやしたものを感ずる朱也。

隣にはニコニコ笑う茜の顔。

朱也の視線の先には入学届けがあつた。

握らされたペンと印鑑。

気付くと手続きがすべて済まされていた。

必要な書類に目を通す茜。

それから数分後。

「よし！」

すべてを確認し終えた瞬間。

茜は不適な笑みを浮かべた。

その表情を朱也は見逃さなかつた。

「いつたい何考えてやがる？」

昔から茜には唯一の欠点がある。

それは……。

「べつ…べつにいい？」

嘘がめちやくちや下手くそなことだつた。

ほとんど棒読みに近い台詞。

さらには口笛まで吹きはじめた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6865y/>

RPG × 学園(仮)

2011年11月24日19時48分発行